オリンピックと疫病、そして嘉納治五郎

真田　久*

The Olympic Games, Pestilence and Jigoro Kano

SANADA Hisashi *

Abstract

The purpose of this study is to describe the relationship between the Olympic Games and pestilence, focusing on the ancient Olympic Games, Antwerp 1920 Games. It is clear that the ancient Olympic Games were built for the recovery from the civil war and pestilence.

Antwerp 1920 Games were celebrated after the World War I and Spanish Influenza pandemic. IOC and the Organizing Committee introduced the Olympic Symbol, Athletes' Swear and Dove leaving for the first time in the opening ceremony. These were the symbol of Solidarity, Fair-play and Peace. Olympism was visualized by these symbolic ceremonies and Japanese athletes who participated in the Games learnted the sport spirit from the Games. Those three symbols are succeeded to the Olympic Games up to now.

Jigoro Kano, chair of the Japanese Delegation, traveled in Europe and USA after the Games to discuss the international situation after the war. He acknowledged that some were fear of the Japanese policy. Also, he learnted the seriousness of the racial discrimination in USA. Kano presented the *Seiryoku Zenyo* and *Jita Kyoei* when the Judo Cultural Society was founded in 1922. And he declared to abolish the racial prejudice to promote mutual human culture. In conclusion, the Olympic Games after the war and pestilence promoted the Olympic spirit. We must learn it for the Tokyo 2020 Games.

Key words: Olympic, Games, Pestilence, Antwerp, Jigoro Kano

はじめに

2020 年 3 月 24 日､国際オリンピック委員会（IOC）トーマス・バッハ会長はじめとする IOC と、日本政府、東京都、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、日本オリンピック委員会（JOC）など日本側との話し合いにより、第 32 回オリンピアード競技大会（東京 2020 大会）の延期が決定された。近代オリンピックにおいては初めての延期となった。その背景は新型コロナウィルスの世界的な蔓延により、世界保健機構（WHO）が 2020 年 3 月 11 日にパンデミック宣言を出し、厳重な警戒が世界に発信され、多くの関係者が大会の延期または中止を求めたからである。

オリンピックと感染症の関係は、実は歴史を紐解くと、古代オリンピックにまで遡る。また 1920 年にベルギーのアントワープで行われた第 7 回オリンピック競技大会もスペインインフルエンザの直後に挙行されている。本研究では、このようなことを踏まえて、オリンピックと疫病との関係性について、さらに団長として参加した嘉納治五郎の大会後の活動について述べ、東京 2020 大会の位置付けを考察したいと思う。

1. 古代オリンピックと疫病

1.1　エリスのイフィトスによるオリンピックの再興

古代オリンピックの起源については、ヘラクレスに関係する伝説、ギリシャの最高神ゼウスに関係する伝説や戦車競走でピサの王に勝利したペロプス

*　筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

の伝説などがある。

伝説とは別に、当時のギリシャ内の戦争と疫病からの回避を目指して競技会が設立された、という説もある。これは紀元2世紀のギリシャ人地誌家パウサニアスが記したもので、次のように書かれている。

「Later on Iphitus, of the line of Oxylus and contemporary with Lycurgus, who drew up the code of laws for the Lacedaemonians, arranged the games at Olympia and re-established afresh the Olympic festival and truce, after an interruption of uncertain length. The reason for this interruption I will set forth when my narrative deals with Olympia. At this time Greece was grievously worn by internal strife and plague, and it occurred to Iphitus to ask the god at Delphi for deliverance from these evils. The story goes that the Pythian priestess ordained that Iphitus himself and the Eleans must renew the Olympic games.

オクシロスの家系で , ラケダイモン人の法律を作ったリュクルゴスと同時代の人物であるイフィトスは、オリンピアでの競技祭を整備し、しばらく中断していたオリンピック競技祭と休戦を新たに再興した。中断の理由についてはオリンピアの項目で詳しく述べる。当時のギリシャは内戦と疫病でひどく疲弊していたので、エリスのイフィトスが、デルフォイの神にこれらの災いから逃れられる術を尋ねた。するとピュティアの巫女は彼とエリスの人々に対してオリンピアでの競技祭を再開するよう命じた。(Pausanias, 5.4.5)（抄訳は著者)」

ここで述べられているオリンピックの起源については、神託を受けた都市国家エリスの指導者イフィトスにより、オリンピアでの祭典が再開されたという内容になっている。イフィトスが再興したオリンピックの年代は、紀元前776年でほぼ間違いないとされている。それはエリスのヒッピアスという学者がオリンピアでの優勝者リストをさまざまな伝承や史料を元に紀元前5世紀に整理しており、それらはほぼ正確であるとされていて、そこから計算すると第1回オリンピックは紀元前776年になるからである（村川, p.95)。

大英博物館発行の“The Ancient Olympic Games”でも、パウサニアスの説がそのまま紹介されている(Swaddling, p.9)。

イストモス、ネメア、デルフォイなどの他の全ギリシャ的競技祭が整備されたのが紀元前6世紀なので、競技会の始まりはこの頃だろうとする説もあるが、紀元前776年という説を退けるには至っていない。パウサニアスの200年前に活躍したギリシャの歴史家ストラボンは、オリンピックの起源に関わるヘラクレスやゼウスの伝説は信じられるものではないと手厳しい（Strabo 8.3.30)。そしてオキシロスがオリンピアを領有していたピサを攻めてオリンピアを彼らの支配下に置き、その後オキシロスたちがオリンピック競技会を開いたが途絶え、イフィトスが中断していた競技会を開いたと述べている(Strabo, 8.3.33)。オキシロスはペロポネソス半島の北西部に移住してきたドーリス人でエリスの都市国家をおこし、その末裔がイフィトスということである（Yalouris, p.82)。

ところでパウサニアスは、イフィトスをリュクルゴスと同時代の人としているが、これは歴史上著名なスパルタ王リュクルゴスの名前を入れることで、権威づけを行ったもので、後世に加えられた記述である可能性が高いと考えられている。紀元前8世紀にオリンピアの名声は高くなく、スパルタがわざわざ山を越えて協定を結ぶ必要はなかったと解釈される（Gardiner, p.43)。パウサニアスと同時代の作家でオリンピアードを使って年代記を記したフレゴンによれば、ピサのクレオステネスも休戦協定に関わったと述べている。またオリンピックの中断は28オリンピアード、112年間中断した後に再興されたとフレゴンは述べているが、それは紀元前776年までのことであろうと英国の社会人類学者J. フレイザー1854-1941年)は結論している(Frazer, p.469)。

こうしてみると紀元前776年に始められたとする古代オリンピックは、実は再興されたものであったということは確実である。再興するきっかけが、戦争と疫病による災難であったということになる。再興する際に、イフィトスは休戦協定を加えた。それによりオリンピックは有名になり、神聖な競技会と認識されるようになった。そうすることで、二度と途絶えることがなくなかったのである。戦争と疫病

図1　デルフォイのアポロン神殿跡（筆者撮影）

からの影響をなくすための手段として、休戦が取り入れられたということになる。休戦はオリンピックを永続化するための知恵であったといえる。

1.2　ゼウスに捧げた祭典

再興される前の競技祭はどのようなものであったのか、ということについては確かな手がかりはないが、英雄や指導者の葬送儀礼として行われた葬送競技であった可能性がある（楠見, pp.25-38）。ホメロスの作品に多く描かれているようにギリシャ各地で行われていた葬送競技の例は枚挙に遑がない。ヘシオドスも葬送競技に招待され、詩歌で賞品をもらっているほどである。古代オリンピックに関連する葬送競技としては、ピサの王に戦車競走で勝利したペロプスの伝説に伴うピサ王のための葬送競技である。オクシロスがピサを征服した時、ピサの指導者の葬送儀礼として行われた可能性はある。しかし葬送競技と歴史時代の古代オリンピックとは同質のものとは言い難い。前 776 年に始められたオリンピックはゼウスを祀る祭典になっていたからである。したがってイフィトスが紀元前 776 年に再興したとされる競技会が、古代オリンピックの起源と考えて良く、その契機となったのが、打ち続いていた都市国家同士の戦争をやめることと疫病を鎮めるためであった。戦争をやめて競技祭を開催する証として休戦を結んだ。エリスとピサの指導者が最初に結び、ピサが滅ぼされた後代にピサの統治者とスパルタ王の名前を変更したものと思われる。パウサニアスの記述はエリス側の史料に基づいて書かれており、ピサについての史料はすでに消滅してしまっていたからである。（真田, 1981, p.149）

古代において休戦の意味は重く、オリンピアで競技祭を始めた際に、戦争を休止するための休戦協定が作成され、オリンピアで祭典が行われる期間、前後含めて当初は 1 ヶ月、のちに徐々に拡大されて 3 ヶ月間は武器を持ってエリスに入ることはできなかった。限定的ではあったが、オリンピックが行われる際に、オリンピアの周辺では平和が保たれていた。これは今日のオリンピックの平和思想の原点でもある。休戦によりオリンピックは聖なる祭典になる。

オリンピアは古くからギリシャの最高神ゼウスの聖地であった。戦争を休止し、裸体で身体のパフォーマンスを競い合うことで神々を称える、これは神々に対する人間の身体活力の献上であったと言える。古代ギリシャ時代の競技は、人間エネルギーの供犠であったと説明する研究者もいる。誰が最も速く走れるか、また遠くに槍を投げられるかは、誰が最も神に捧げられるのに相応しいかを決めるためであるということになる（Sansonne, p.80）。古代オリンピックが約 1200 年間続いた理由の一つは、このような宗教的な意味合いを持ち続けたことにある。災難に見舞われた時、神の神託を聞き、それに基づいて行動することで、災難から逃れようとするのは人間の常であるし、日本の祭りにも災害からの回避、復興という意味合いが含まれているものはたくさんある。内戦と疫病で疲弊していたエリスの国で、それらを回避するためにオリンピアで競技会を行う、というのはそのような宗教的な意味があったのである。こうしてみるとオリンピアで競技会が始められたのは、戦争と疫病からの社会の復興を目指していたからということができる。今日のオリンピックは古代オリンピックの復活という側面も有していたので、オリンピックは、そもそも戦争や疫病からの復興と関わりがあると解釈できよう。

図 2　オリンピアの競技場（大林太朗氏撮影）

1.3　第 700 回オリンピアード

古代オリンピックも 4 年ごとに行われていた。これは太陽暦と太陰暦など多様な暦がギリシャ各地で使用されていて、その暦を統一するという意味を持っていた。この 4 年間はオリンピアース（Olympias）と呼ばれ、紀元前 776 年が第 1 オリンピアースの 1 年目になる。競技祭はオリンピアースの 1 年目に開催されていた。フレゴンは第 1 オリンピアースから第 229 オリンピアースまでの年代記を書き上げている。古代人にとって、オリンピックは暦の役割も果たしていた。記録上最後の古代オリンピックは紀元 393 年に行われた第 293 回大会、つまり第 293 回オリンピアースになる。オリンピアースの考えは近代オリンピックでも採用されてオリンピアードと呼ばれ、第 1 回近代オリンピックが開催された 1896 年が第 1 回オリンピアードの始まりになった。2020 年は第 32 回オリンピアードの始まり

の第1年であった。今日のオリンピアードを古代オリンピックから数えると、2020年は第699回オリンピアードの4年目になり、2021年は第700回オリンピアードの1年目になる。つまり、古代オリンピックから数えると、2021年にオリンピックを行うことが正統であり、第700回オリンピアードの幕開けに当たるのである。

2. アントワープ1920大会

古代オリンピックの起源、つまり戦争と疫病からの復興という視点を持つ近代オリンピックの大会が約百年前に開催されたアントワープ1920大会である。この大会は第一次世界大戦とスペインインフルエンザ直後に開催された。

第一次世界大戦は、1914年に始まって1918年まで続き、連合国（ロシア、フランス、英国、アメリカ）と同盟国（ドイツ、オーストリア･ハンガリー、トルコ）による戦争で､1800万人もの死者を出した。さらに、アメリカで発したインフルエンザ（スペインで公表されたためスペインインフルエンザと呼ばれた）が1918年から1920年まで世界的に流行し、死者数は2000万人から5000万人と言われている。第一次世界大戦はヨーロッパが主な戦場になったため、ヨーロッパ各地では1920年に入ってもその傷跡が残されていた。インフルエンザの影響も大きく、仮設の病棟が各地で作られ、応急手当てを受ける人々が後を絶たなかった。戦争と疫病の直後に開催されたのがベルギーでのアントワープ大会であった。アントワープへの招致には、後にIOC会長に就任するベルギー出身のIOC委員ラツールの積極的な働きが大きかった。1919年4月のIOCの会議で、フランスのリヨンも立候補していたが、ベルギーのアントワープに満場一致で決まった。準備期間は1年間しかなかったが、なんとか開催にこぎつけたのであった。

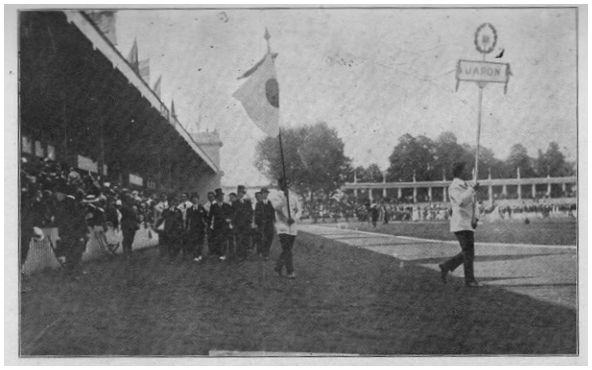

図3　日本選手団の入場行進
国旗を持つのは野口（野口，1921）

大会の開催期間は1920年4月20日から9月12日までと長く、参加国は29カ国で23競技156種目が行われた。オリンピック冬季競技大会が創設前だったので、アイスホッケーとフィギュアスケートが行われ、このような期間となったが、開会式は8月14日に行われている。

この大会ではオリンピズムが可視化されたことが大きな特徴である。オリンピックシンボルが初めて掲揚され、選手宣誓と放鳩も始まった。第一次世界大戦とスペインインフルエンザからの復興を図る中でオリンピズムを可視化したのであった。

2.1　オリンピックシンボル（五輪旗）の掲揚

オリンピズムの可視化の一つは、オリンピックシンボルの初めての掲揚である。オリンピックシンボルはクーベルタン自身の手によるデザインであった。彼は次のように述べている。

「これら5つの輪は、オリンピズムに引き継がれ、実りある競争を受け入れる世界の5大陸を表している。さらに、白い背景を含む6色は、すべての国旗の色を再現する。（Mallon, p.7）

全ての国の国旗を示す色を用いて、五つの大陸を結ぶ、つまり連帯するという意味であった。このデザインはクーベルタンにより1913年に発表され、1914年のオリンピックコングレス（パリ、ソルボンヌ）でIOCに寄贈された。1914年6月15日にオリンピックシンボルとして公認されたのであった。ベルリン1916大会は第一次世界大戦で中止になったので、オリンピック競技大会での掲揚はアントワープ1920大会が初ということになった。

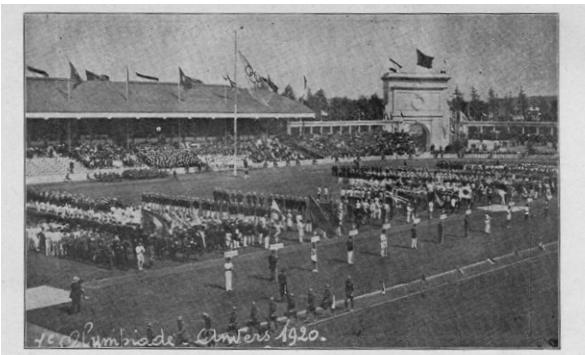

図4　五輪旗が初めて掲揚されたアントワープ
大会開会式（野口，1921）

第一次世界大戦とインフルエンザパンデミックからの復興に貢献した大会となるが、アントワープ市庁舎でのベルギー国王列席の元での挨拶で、クーベルタンは次のようにこの大会を総括している。

「第7回オリンピック競技大会がもたらしたもの、

それは一般的な理解であり、それ故全ての人々に受け入れられることが確実なこと、つまり危険な専門化により不幸な枠組みへ向かう時代にあって、人類を団結させる祭典であるということである」（Mallon, p.13）

第一次世界大戦で、アスリートも敵と味方に分かれてしまったが、戦争が終わり、また全ての人々が集う場としてのオリンピック競技大会が開催されたことの意味は大きかった。その意味ではオリンピックシンボルのもとに、全ての国々が連帯していくことの重要性を象徴する大会となった。（但し、ドイツ、オーストリア・ハンガリー帝国、トルコなどの同盟国はこの大会に参加しなかった。）

2.2　選手宣誓

アントワープ 1920 大会の開会式において、選手宣誓が初めて導入された。この大会でフェンシングのベルギー代表ヴィクトル・ボワン選手が次のような宣誓を行なっている。

「我々は祖国とスポーツの名誉のために、騎士道精神をもってオリンピック競技大会に参加することを誓う（Mallon, p.8）

選手宣誓についてクーベルタンは、1906 年 7 月の Revue Olympique でオリンピックのセレモニーで選手の公正さや公平さの誓いを導入すべきであると言及していた。騎士道精神という語はクーベルタンがオリンピズムを語る際によく用いる語である。1935 年にはオリンピズムの５原則を説明する中で、騎士道精神について、「アスリートは中世騎士道の友愛の精神のもと、名誉とフェアプレイのコードで競技する」と述べている（Naul, pp.13-14)。もっとも選手宣誓は古代ギリシャにおいても行われていた。古代オリンピックでは、祭典が始まる朝、選手は 10 カ月間のトレーニングを行ったこと、規則を守り不正を行わない旨の宣誓を行うとともに、審判は不正な判定を下さないことを評議会場にある”誓いのゼウス像”の前で行った。このような古代オリンピックの習慣を騎士道精神の考えを通して近代に復興したのがアントワープ 1920 大会であったといえる。

2.3　初めての放鳩

さらに 1920 大会の開会式で導入されたものに放鳩がある。平和の象徴として鳩が空に放たれたのであった。参加国と同数の 29 羽の鳩が用意された。これらの鳩は軍で通信用に使用されていた。戦争が終わったことで、鳩の使用は必要なくなったので、放鳩したのである。それ自体が平和の象徴であった。

平和の象徴となるメダリストがこの大会で誕生した。それは陸上 1500m の銀メダリスト、英国出身のフィリップ・ノエルベーカー（1889-1982）である。彼はストックホルム 1912 大会に続いてアントワープ 1920 大会、パリ 1924 大会に出場した。アントワープ 1920 大会では、陸上競技の 800m と 1500m に出場し、後者で準優勝した。アントワープ大会のことを彼は次のように記している。

「名誉の勲章はもちろん勇敢なベルギー人に捧げられる。5 年前にはいわれのない攻撃による犠牲を払ったことはよく知られている。しかしベルギーの組織には大きな負担が強いられた。4 年間の戦争と敵の占領により中世の町は完全に破壊され、まだ傷が癒えていなかった。様々なオリンピック競技のために必要な競技施設やホテルを準備し、また各国の王室を受け入れて社交的な機会を設けたりすることを 18 ヶ月間で準備することは、ヘラクレスの偉業のようなものであった。ヘラクレスの偉業のような努力で、彼らは成し遂げた。

第二次大戦後のウェンブリーでのサッカー決勝戦の時と同じような開放感を感じた。4 年間という無駄な歳月を費やした戦争は終わった。世界は変わり、それとともにより良い、より幸福な方へ向かっていった。それゆえ、アントワープでは心底楽しめた（Mallon,pp.12-13.」

ノエルベーカーは、第一次大戦に衛生兵として従軍した経験もあり、戦後は一貫して平和運動を推進、国際連盟創設に関わった。第二次大戦後は核軍縮を支持した行動家で知られ、1959 年、ノーベル平和賞を受賞したのである。アントワープ 1920 大会のメダリストがノーベル平和賞を受賞したことは、平和が強調された大会に相応しいといえよう。

2.4　日本選手の見た競技精神

アントワープ 1920 大会には日本選手団 15 名が参加した。団長は嘉納治五郎で陸上競技に 12 名、テニスに 2 名、水泳に 2 名である（うち 51 名は陸上と水泳にエントリーしていた）。この大会の陸上競技の主将を務めた野口源三郎（十種競技に出場）が報告を書いている。開会式では初めてとなる選手宣誓や放鳩の様子なども描写し、競技の詳細な結果のみならず、この大会で経験した競技精神について書き残している。

著名な 800m の記録保持者、米国メレデッシがこの大会で 400m に出場し、観衆が注目した。ところが彼は準決勝で敗退してしまう。その直後に彼はその組で優勝したシェーア選手に握手して祝福した。その様子を野口は次のように記している。

「此の時敗れたメレデッシ選手は、従容として右腕にスウエターを携え、戦友シェーア選手の優勝を固い握手に祝福して、落つき払って退場し其の態度には依然として、大選手たるの襟度が見えて、一種崇高な立派さがあった。此れについて思ふ、優勝者となれば仮令ひ精神上の修練は欠けてをっても、優勝した誇りの感じは不知不識其の人に自重を教へ、立派な態度を作らせるものである。けれ共、武運拙くして敗戦した際、従容として落ち着いた態度の、自ら出来る者は、余程の修練がなければならぬ。メ選手は此のレースに於て、必ず彼の全力を傾倒したに相違ない。して見れば、彼が胸中は、光風霽月一点の暗雲も留めなかったのであろう。斯くして彼は、体力と技術に於ては優勝する事は出来なかった。けれ共其のスピリットに於ては、依然世界の大選手である事を観衆に認識せしめる事が出来たのだ。戦敗れて尚誉れありとはメレデッシ選手の如きをいふのではないか」（野口，1921, pp.311-312）

野口は選手のフェアプレイについて書き残したのである。

また、5000m と 10000m の決勝についても野口は競技精神について記している。5000m と 10000m では、フィンランドのヌルミとフランスのギルモが優勝争いをした。5000m ではギルモ、10000m ではヌルミが勝つが、デッドヒートにそれぞれの応援団は相手の選手にチアースを 3 回言って声援を送ったのであった。

図 5　5000m でのギルモとヌルミのデッドヒート（Skildrade，1920）

「斯ふした際どいレースに、一方は勝ち、一方は敗けたのではあるけれ共、何れも己が最善を尽くしたといふ点に於ては、遺憾は無い。其れに対して応援団が身方の勝利もさる事乍ら、対手が能く我が選手と力闘したといふ事にむかって相手の技量を賞賛した態度は実に競技精神の真実な発露である。斯かる精神の汪溢こそ、健全なスポーツの実相であって、此の清浄な流れを汲まんが為に、我等はスポーツに浸るのである。斯かる気高い精神の流れは、万場の観衆を同化しないではいなかった」（野口，1921, p.314）

アスリートの真摯なパフォーマンスにより、観衆が連帯していった様が映し出されている。外国のアスリートがスポーツの精神をよく理解していること、また観衆も理解があることを羨望に耐えぬと書いている。そして、「何のゲームに於ても、敗れた選手と勝った選手と虚心坦懐に握手の交換をなす事等は、日本の様に競技に熱狂の結果、競技精神を没却遷都する傾向ある現状に比べて、最もよい他山の石でなければならぬ。

我等は今後の競技界の向上発達を計る為めには競技者自身も、其れを観る者も、唯其の一面である技術の優劣を以て全部とせず、競技の尊い一面をなす、スピリッツの発露をより重く観るに至らなければならぬ事を衷心心掛けねばならぬと思ふ」（野口，1921, p.316）

野口源三郎はこの競技精神を日本の学校体育や競技スポーツで広めていくべく行動する。パリ 1924 大会には監督として参加し、アムステルダム 1928 大会でもスタッフとして参加するが、競技精神の普及については常に言及している。

「吾人は健全なるスポーツの発達によって一方技術の研究を計り、体力の増進を考慮し同時に香ばしい性格上の成功をもなし得る様努力せねばならない」（野口，1924, p10.）

「スポートの本質は、人生の準備時代の青少年にあっては品性陶冶の自然的方法として重要の価値を認むるものである」（野口，1928, p8）

野口は、アントワープ大会で目の当たりにしたフェアプレイや連帯というものが、スポーツによる品性陶冶という考えに昇華させていったのである。

またアントワープ 1920 大会のマラソンに出場した金栗四三は、世界記録を 1915 年に樹立するなどして、メダルへの大きな期待をかけられていた。ストックホルム 1912 大会で暑さのために完走できなかった金栗は、暑さ対策のトレーニングを繰り返し行い、アントワープ大会を迎えた。しかしマラソン当日は朝から雨が降り、足袋で走る金栗ら日本選手にとって、良い条件とはいえなかった。マラソンのレースの当日、妻と義理の母に送った手紙には次のように書かれていた。

「15 日から毎日盛な競争が行はれたる様なるが、日本選手一つとして勝ったのはありません。テニス

は或は勝つかも知れません。愈私のやるマラソン競争が本日午後四時からあります。朝から雨がふります。気候は寒く私等にはよいと思ひます。何人走るか、勝つか敗けるかは分かりませんが、やる積もりです。大正九年八月二十二日朝十時　ベルギーアントワープ　四三」（玉名市立歴史博物館こころピア所蔵）

さらにレースの翌日には次のような手紙が同じく妻と義理の母宛に出された。

「五一人ばかり一緒に走りました。雨ふり寒く皆くるしみました。私もよく走りましたが、練習中足をいためて居たのが、雨と寒さで起り出して六番位の処迄次第に抜きましたのを道中二回歩行したためにまた抜かれて、遂に十六着となりました。足さへ痛まねばと思と残念な事をしました。日本人のうち二十着、二十二着、二十四着と皆つきました。二十人は落伍しました。元気です。

大正九年八月二十三日朝

ベルギーアントワープ競争日翌日」（玉名市立歴史博物館こころピア所蔵）

マラソンには金栗をはじめ、茂木、八島、三浦の4名が参加し皆完走したが、金栗に対する期待が大きかっただけに、残念な結果であったようだ。

図6　スタート直前のマラソン（野口，1921）

金栗は大会後、ドイツを訪れる。金栗が絶好調の時、本来ならベルリン1916大会が行われていたはずのオリンピック競技場を訪問した。そこで見たのは、第一次大戦で敗戦したドイツの子供たちが大勢集まって行われた競技会の姿であった。戦争とインフルエンザの後、痩せて青白い顔をした学童たちであったが、嬉々としてスポーツを楽しんでいた。また市内の公園では、多くの女性たちが市民と一緒にスポーツを楽しんでいた。（長谷川，p.217）この光景は金栗に大きな印象を与えた。スポーツが戦争やインフルエンザによる社会の復興に役立つという事を感じさせたのであった。特に女性がスポーツを行うことで国じゅうを明るく健康にできるに違いないと思った。

帰国後、金栗は女性の体育やスポーツの普及に貢献すべく、嘉納治五郎に依頼して、東京女子師範学校の教員に就職する。1921年1月から1931年3月まで10年間、東京女子師範学校に勤務した。その間に第1回女子テニス大会や女子連合競技大会を開催、また関東女子体育連盟を結成するなど女子体育の普及に足跡を築いた。アントワープ1920大会を通して、マラソンなどの長距離走のみならず、女子体育の発展にも貢献したのであった。

図7　熊谷・柏尾のテニスダブルス決勝（Skildrade, 1920）

以上のことから、第一次世界大戦とインフルエンザからの復興の中で開催されたアントワープ1920大会は、連帯、フェアプレー、平和というオリンピズムに関連する概念を、可視化したと言える。さらに参加した日本代表団に対し、そうしたオリンピック精神を理解させ、日本に持ち帰って普及していくのであった。第一次世界大戦後の復興に関連して女子体育の重要性も理解され、女子体育の発展につながったのであった。

図8　コレア丸甲板上の選手（野口，1921）

3. アントワープ 1920 大会と嘉納治五郎

嘉納治五郎はアントワープ大会に日本選手団団長として、またIOC委員として出席した。オリンピックの開会式は荘厳に挙行されたこと、日本選手はテニスとマラソンに好成績を残したと総評している（嘉納，*有効の活動* 7 巻 2 号，pp.5-7）。

3.1　欧米各国の識者との会談

大会後の 9 月、嘉納はブリュッセルにて安達公使が開いた晩餐会に出席し、クーベルタン IOC 会長やバイエ・ラツールベルギーオリンピック委員会会長、前総理大臣や文部大臣らと懇談した。その後嘉納は欧州各国を回り、チェコスロバキヤの大統領初め教育研究者、政治家や行政官に面談して第一次世界大戦後の変化の様子を見聞した。訪問した都市は、ベルリン、ミュンヘン、プラハ、ウィーン、インスブルック、ベルン、パリ、ランス、ロンドン、オックスフォード、ケンブリッジ、ニューヨーク、ワシントン、ロサンゼルスで、横浜に帰着したのは 1921 年 2 月 11 日であった。ベルリンでは壊された建物がそのままになっているものも多かった。プロイセン政府の教育政策が知育中心から体育や手工も重視すること、身分による教育の違いをなくすように転換されることなどが紹介された。

ウィーンでは、物価の高騰や物不足による生活苦に陥っている様子を門番や出稼ぎに来ている人たちに直接話しかけて確認した（嘉納，*有効の活動* 7 巻 3 号，p.5）。

ランスでは村落が戦争で破壊された無惨な様子を見学した（嘉納，*有効の活動*，7 巻 6 号，p.8）。

オックスフォードのバリオル・コレジの校長からは、学生はドイツ人のように学業に熱心ではないが、運動場にて精神教育を行い、団体のために個人を犠牲にする精神や、紳士としての行儀作法を教えていること、また、戦争で女子と男子を区別する理由はなくなり、女子でも学位が与えられ、如何なる職務にもつけるようになったことが紹介された。さらに国際連盟を創設しなければ世界の平和の維持は不可能であるとの議論もされた（嘉納，*有効の活動*，7 巻 11 号，p.8）。

そのほか英国では、日本の膨張政策も話題になり、米国でも日本は侵略の野心を持っていると考えられていることを嘉納は感じた。日本人は米国人によく理解されていない、その原因は引っ込み思案で進んで彼らと交わろうとしないからである、と述べている。その一方、米国人は「黒人と白人とは到底融和することが出来ぬと思って居る者が多いやうである」という感触を嘉納は得た。シカゴ大学総長と会談した際にも「同博士も黒人は殆ど同化することの出来ぬものと諦めて居るように見受けられた」と述べていて、第一次大戦後に急増した米国への移民に対する問題の深さを認識したものと思われる（嘉納、*有効の活動*，8 巻 3 号，pp.14-15）。1920 大会で示したオリンピックシンボル（五輪旗）の連帯は理想ではあるが、現実社会ではそれとは逆に、分断が進んでいる様子を認識した。

3.2　講道館文化会の設立

嘉納は帰国 1 年後の 1922 年 1 月 1 日にそれまでの柔道会を改めて講道館文化会を設立する。そこには嘉納がアントワープ 1920 大会を通して見聞した世界観に対応する生き方が示された。第一次世界大戦後に激動する世界にあって、日本に対する欧米の厳しい見方に対して、どのように生きていくべきなのか、嘉納の考えがあらわれている。

講道館文化会を創設した理由を次のように説明している。

> 「最近世界の大勢を察するに国際関係は日に錯綜を加へ国々互に融和提携しなければ独立を維持することが困難になって来た。従って吾人は今日の状態に満足せず進んで広く世界に友邦を得ることに努めなければ国家の隆昌を期することが出来ぬ。（略）この時に臨んで我が同志は多年講道館柔道の研究によって体得した精力最善活用の原理を応用して世に貢献せんと決心し新に講道館文化会を設くることにした（嘉納，1928）」
>
> そして次のような宣言と綱領を発表した（生誕 150 周年記念出版委員会編，pp.39-40）。

《宣言》

本会は精力最善活用に依って人生各般の目的を達成せんことを主義とす。本会はこの主義に基いて、

一、各個人に対しては身体を強健にし智徳を錬磨し社会に於て有力なる要素たらしめんことを期す

二、国家に就いては国体を尊び歴史を重んじ其の隆昌を図らんが為常に必要なる改善を怠らざらむことを期す

三、社会に在っては個人団体各互に相助け相譲り徹底せる融和を実現せしめんことを期す

四、世界全般に亘っては人種的偏見を去り文化の向上均霑に努め人類の共栄を図らんことを期す

この宣言は個人、社会、国家、そして世界に対してという具合に、自身を取り巻く対象に対する向き合い方を示した。国家について改革を怠らないようにすること、また世界に対しては、人種的偏見を去り、と特に米国で感じた黒人への差別をなくさない限り、人類共通の文化であるスポーツやオリンピック・ムーブメントを発展させていくことはできない、という嘉納の決意を感じさせるものである。1948 年の世界人権宣言より 26 年も前のことである。

《綱領》
一、精力の最善活用は自己完成の要訣なり
二、自己完成は他の完成を助くることに依って成就す
三、自他完成は人類共栄の基なり

嘉納は 1915 年に発表した「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である」の心身の力を精力の二文字にし、人間の行動は善を目的に最も有効に行うという事で「精力最善活用」と唱えた。そして、精力最善活用によって自己を完成させ、個人の完成が直ちに他の完成を助け、自他一体となって共栄することによって人類の平和と幸福を求めたのである。精力善用、自他共栄の考えが示されたのであった。

精力最善活用、自他共栄の考えは、1920 年から 21 年にかけて様々な人々にも問いかけて相談し、嘉納は確信を得た上で公表したのである。後に彼は次のように述べている。

「欧米が、以前自分が巡遊したときに比し、大戦乱後、どんなに変わったか、経済上の変化はどうか、思想上の変化はどういう状態であるか、これを実地に見聞しようとするのが主な目的であった、この旅行は、短期間であったが、大いに得るところがあった。帰朝後、一箇年足らず攻究をして、いよいよ、かねてから介抱していた自分の意見に謝りがないということを確定するに至ったのである。（嘉納・大滝、p.160）」

“精力善用・自他共栄”、4 項目の宣言はこうして生まれたのであった。

連帯することと平和の大切さというオリンピック・ムーブメントの深まりのみならず、日本の体育やスポーツの発展にとっても、第一次世界大戦とスペイン・インフルエンザの復興として開催された大会への参加は大きな意味をもたらしたと言える。

結び

1923 年 9 月に関東大震災が起き、東京や横浜はじめ関東一円の大都市が火災で大きな被害が出る。嘉納治五郎は講道館文化会の活動で樺太から直ちに戻ると、大日本体育協会の陣頭指揮を取り、全日本選手権の都内での開催、パリ 1924 大会への参加決定、そして公園にスポーツ施設の設置など電光石火の如くスポーツによる復興を成し遂げていくのであった。

アントワープ 1920 大会とその後の各国の視察により、人々をいかに連帯させて社会を復興させていくかを見聞していたことも嘉納の行動を後押ししたのではないかと思われる。特に人種的な偏見を去れ、と明示したのは、第一次世界大戦後に起こってきたアメリカにおける人種差別の問題を肌で感じ、その問題を克服しなければ連帯を強調した人類共通の文化であるスポーツやオリンピック・ムーブメントは広がらない、という思いからであろう。1948 年の世界人権宣言より 26 年前に発せられた嘉納治五郎の宣言および“精力善用・自他共栄”は、1920 大会を契機として練られたものであった。

人類は古代より、オリンピックを通して戦争や疫病に対して立ち向かってきたといえる。古代においては休戦を編み出し、近代においては、連帯の象徴としてオリンピック・シンボルを編み出した。さらに嘉納治五郎は「精力善用・自他共栄」の考えと世界に対して人種的偏見の撤廃を宣言した。それらを通して人々は多くを学んできた。2021 年に東京 2020 大会が開催され、オリンピックの本質を提示することで、東京 2020 大会に参加して多くのことを学ぶことができたと参加国・地域の人々から語り継がれるような大会になるのではないかと思う。困難な中、懸命に頑張り抜いたアスリートたちがパフォーマンスを発揮しつつ、互いを称え合う姿を通して、大会モットーである「United by Emotion」を観る人に与え、大会ビジョンで示された「スポーツは世界と未来を変える力がある」ということを示すような大会になることを期待したい。

末尾に、本学の名誉博士でもあるトーマス・バッハ IOC 会長のメッセージを東京 2020 大会の位置付けとして示しておきたい。このメッセージは、2020 年 12 月 11 日に開催された筑波大学、日本体育大学、鹿屋体育大学の国際スポーツアカデミーのオンライン会議に寄せられたメッセージである。

「私の親愛なる友人である、真田久つくば国際スポーツアカデミー長、学生のみなさん、修了生のみなさん、そして親愛なるオリンピックの友人たち、ミナサマコンニチワ。

このカンファレンスがバーチャルで行われているという事実そのものが、世界的なコロナウイルス

危機のために私たち全員が直面している前例のない状況を反映しています。この状況は、オリンピック・コミュニティのすべての人にとって、またスポーツ界全体にとっても、深い意味を持つことが既に明らかになっています。最も目に見える影響は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を来年度に延期するという歴史的な決断が下されたことでした。史上初となるこの決定は、オリンピック・ムーブメントにおける多くの人々、選手、そしてもちろん私たちの日本のパートナーとフランスの一致団結した協力がなければ成し得なかったことです。東京を訪問し、私たちの日本の友人の偉大なる決意、そして素晴らしい進捗状況を目にして、私は確信を新たにしています。来年度、私たちは必ずやこれまで以上に安全かつ確実にオリンピック大会の開催を祝い合うことができるでしょう。

このように決意し、目標を1つにすることで、東京は最高の準備が整ったオリンピック開催都市であり続けています。206の国と地域のオリンピック委員会すべてとIOC難民選手団の選手たちが東京に集結したとき、希望、連帯感、レジリエンス、そしてあらゆる多様性の中での人類の団結という力強いメッセージを発信することになるでしょう。そうすることで、延期されていたこのオリンピック大会が、私たちが今まさにその中にいる暗いトンネルの先に灯る明かりとなるのです。この危機がいかに大きな影響力を持つか、私たちはまだ日々学んでいるところですが、既に学ぶことのできた第一の教訓として、より強い団結、共同体の中での、そして他の共同体との一層の団結が必要とされており、私はそれを大いに期待しています。

オリンピックの中心にあるのは「団結」であり、オリンピックによってこの極めて多様な世界が1つに結ばれます。このような困難な時代、こうしたオリンピックの価値がかつてないほど必要とされています。今回のコロナウイルスの世界的危機は、社会におけるスポーツの重要な役割を浮き彫りにしました。このカンファレンスは、スポーツがパンデミックとの戦いに不可欠な要素として貢献できることを強調する良い機会です。スポーツはまた危機から回復するための解決策に欠かせない要素でもあります。コロナ後の世界では、スポーツの求心力、オリンピックの価値である卓越性、友情、尊敬、連帯が必要になります。そしてつくば国際スポーツアカデミーでは、教育と感動の場を提供することで、みなさんがそうした新しい世界に備えることができるようにしています。オリンピックの価値を共有する新世代のスポーツ指導者、筑波大学を始めとする諸機関、および筑波大学のパートナー機関である日本体育大学と鹿屋体育大学が、未来を形作る取り組みを既に開始しています。そして、スポーツを通じ世界をより良い場所にしていくのは、学生そして修了生のみなさんです。

これはまさにスポーツの価値の重要性を再認識する絶好の機会ではないでしょうか。私たちは未来を見据え、延期された東京2020オリンピック競技大会に大いなる自信と期待を持って臨んでいきます。筑波大学とそのパートナー機関が、日本と世界でオリンピックの価値を推進するために行っている重要な活動に、私たちは大変満足しており、感謝しています。スポーツを人類のために役立てようという共通の目標を追求する中で、筑波大学の名誉博士としてみなさんと個人的な絆を共有できることを誇りに思います。

この数週間と1ヶ月の間に、スポーツにおいても人生の様々な課題においても、私たちは常に力を合わせてより強くなれることを確認してきました。このように自信と希望を持って未来を見据えるオリンピック精神のもと、実りある議論がなされ、カンファレンスが大きな成功を収めることを祈念しています。」

（2020年12月11日　IOC会長　トーマス･バッハ）

引用文献

1） Frazer, James（1898）：Pausanias's description of Greece. Macmillan, London, p.469.

2） Gardiner, E.N.,（1910）：Greek athletics and festivals. Macmillan, London, p.43.

3） Golden, Mark（1998）：Sport and Society in Ancient Greece. Cambridge University Press, Cambridge, pp.13-14.

4） 長谷川孝道（2018）：走れ25万キロ　マラソンの父 金栗四三伝．熊本日日新聞社，熊本

5） 嘉納治五郎1921：国際オリムピック大会を終えて．*有効の活動* 7巻2号，3号，6号，11号

6） 嘉納治五郎1922）：国際オリムピック大会を終えて（続き）．*有効の活動* 8巻3号

7） 嘉納治五郎口述・落合寅平筆録1928）：柔道家としての嘉納治五郎16．*作興* 7巻4号

8） 嘉納治五郎・大滝忠夫編（1972）：私の生涯と柔道．　新人物往来社，東京，p.160.

10） 楠見千鶴子（2004）：ギリシアの古代オリンピック．　講談社，東京，pp.25-38.

11） Mallon, Bill and Bijkerk, Anthony Th.（2003）：The 1920 Olympic Games：Results for all

competitors in all events, with commentary Jefferson, N.C., pp.7-13.
12）村川堅太郎（1963）オリンピア：遺跡・祭典・競技．中央公論社、東京、p.95.
13）Naul R., Binder D., Rychteckey A., Culpan I.（2017）Olympic Education：An international review, Routledge, London.
14）野口源三郎（1921）第7回オリンピック陸上競技の印象．中文館書店，東京，pp.311-316,
15）野口源三郎（1924）我がオリンピック選手とコーチ．*体育と競技* 3巻12号，目黒書店，東京，p.10.
16）野口源三郎（1928）スポーツマンシップと教育問題（一）．体育と競技7巻2号，p.8.
17）Pausanias,（Pausanias Description of Greece with an English translation by W.H.S.Jones and H.A.Ormerod, Ⅱ, 1977, Harvard University Press）5.4.5-6.
18）真田久（1981）Pausanias のオリンピック競技記述の研究．*第32回日本体育学会大会号*． p.149
19）Sansonne David（1988）：Greek Athletics and Genesis of Sport. University of California Press. California, p.80.
20）生誕150周年記念出版委員会編（2011）：嘉納治五郎：気概と行動の教育者．筑波大学出版会，東京，pp.39-40.
21）Skildrade i ord och bild av Erik Bergvall i de Svenska deltagarna segling ° V.Interspel（1920）: Olympiska Spelen i Antwerpen 1920. Ahlen & Akerlunds, Stockholm.
22）Strabo,（The geography of Strabo, Vol. 8 with an English translation by Horace Leonard Jones Rev.［ed.］Cambridge, Mass.：Harvard Univ. Press, 1949）8.4.30-33.
23）Swaddling, Judith（1984）：The Ancient Olympic Games. British Museum Publication Ltd., London, p.9.
24）Yalouris N.ed.（1979）：The Eternal Olympics：the art and history of sport. Caratzas Brothers, New York, p.82.